

東林木町の「浜集落」は鳶巣では最も新しくできた集落です。

江戸時代の中期、元禄の大洪水の記録がありますが、「島根県史」によりますと元禄十五年（一七〇二）六月から八月にかけて数回の大風雨により斐伊川堤防（伊丹堂西から武志境切れ）が決壊して一面の湖水となったと記録されています。

水がひいたあとには砂浜地帯が形成され、それが集落の誕生となったようです。

まず、北山の山麓で居住していた門前谷や阿土谷の何軒かの人達が山崩れに遭いやむなくこの地に転居され、また分家されたりして次第に多くの人々が家を建て始めて「浜集落」が形成されたものと思われます。

また、明治四十五年に開通した一畑軽便鉄道に鳶巣地区で由一の「林木駅」が誕生したのは大正三年です。

昭和に入ると一畑軽便は「松江く大社神門」間の開通を計画し、その乗り換え駅を浜集落の西方の屋号「中前」（中島篤宅）の南に建てる案が持ちあがりましたが、結局 川跡村の「川跡駅」に決定しました。

そして電車利用の効率から「大寺駅」が誕生して「林木駅」は無くなりました。

「浜」という地名は湖の水際の砂丘地帯を言うそうで、斐伊川

の洪水で砂浜が広がった地帯だから「浜」というのだと古老が話してくれました。

現在、浜町内は「三十五戸」と鳶巣地区では一番多くの居を構える町内となっています。

